して受け入れた青年招へい事業参加インド青年19名は、どの視察先でも素晴らしい歓迎を受けました。北海道旭川聾学校での、聴覚障がいで殆ど聞こえなくとも素晴らしい楽器演奏をする生徒達への教師達の熱心な指導の様子。同学校の幼稚部の年中行事「餅つき」への飛び入り参加。養護学校の給食での、「母親のように」食事の世話をする教職員の献身さ。旭川市立陵雲小学校の全校集会で歌の交換等。様々なことを参加青年たちは、見て聞いて、そして体験しました。

また、現職教員との意見交換会では各々の教育事情を語り合い、インド青年だけでなく日本人教員にとってもまたとない良い機会となりました。

参加青年達が学ぶだけでなく、視察訪問受入先の皆さん、2泊3日のホームステイ受入ホストファミリー、そして実施協力団体の私達自身が青年達を通じて多くのことを学べることこそが、この青年招へい事業最大の利点です。そしてこの友好交流こそが、研修の目的を明瞭にし、さらに意義深いものとするのだと確信しております。

これまでの事業を通じ育んだ青年達との友情をさらに深めつつ、次回の受け入れを今から心待ちにするボランティアの皆さんと共に、今後もこの事業を楽しみたいと思います。

（旭川市国際交流委員会　熊谷）

函館に響きわたる「バンブーダンス」 ―函館から―

2005年5月12日、やや緊張した面持ちで集まったフィリピン水産研修の一行15名。それぞれが正装である民族衣装に身を包み、これから始まる3週間の研修に胸躍らせ、臨んだ開講式。受入側である（財）北海道国際交流センター（HIF）も一貫型青年招へいは初めてであり、緊張感をもってのスタートだった。東京での研修を終え、いよいよ函館に到着。国際海洋都市構想を打ち出し、水産業が盛んな函館だけに研修プログラムには事欠かない。ウニ、アワビの養殖所の視察、昆布やホタテは船に乗って体験する。また、漁業組合の仕組みから、加工品について、水産全般にわたる講義から地球環境についての話まで、ぎっしりとスケジュールが組まれた。途中疲れた時もあったかもしれない青年たちであったが、そこは持ち前の明るさで、積極的に研修を続けていった。活発な意見交換で時間を忘れるほど白熱したことも。そして、何と言っても“バンブーダンス”で見られたチームワークの良さだ。時間があれば、ダンスや歌の練習をし、ホストファミリーや地元の人たちとの多くの交流を生んだ。今でも、聞こえてきそうな賑やかなリズム。フィリピン青年たちとの思い出は多くの人の心に刻まれた。Paalam.Salamat（さようなら、そしてありがとう）。

左上：青年と一緒にバンブーダンスを楽しむホストファミリー　右上：ウニ種苗センターで熱心に見学する青年
左下：ホタテと昆布の養殖の見学に行く船上で　右下：桜に歓喜する青年

（（財）北海道国際交流センター（HIF）　池田）

「ブータン王国の校長先生たち!!」 ―滝川から―

上：滝川第三小学校で小学生と交流を行う、ブータンからの青年　下：地元FMに出演するブータンからの青年

「え?25歳で校長先生??」、10名全員が小中学校の校長先生だと分かった時、研修先の各学校の校長先生や教頭先生からは驚きとうらやむ声が漏れました。

12月6日（火）～13日（火）までの8日間、教育分野で初めて来滝したブータン王国の青年は、なんと10名全員が小中学校の校長先生でした。

GNP（国民総生産）ではなくGNH（国民総幸福量）を大切にする神秘の国ブータンから来た先生達は、滝川市教育委員会、江部乙中学校、おおぞら幼稚園、滝川市美術自然史館、滝川第三小学校等で研修を行いましたが、素晴らしい青年一同に受入側の先生や生徒達は驚きと感動を覚えました。中でも江部乙中学校では、青年を歓迎するために、江部乙小学校の5、6年生も招いた交流会を開催し、生徒達が合唱などで歓迎しましたが、返礼に行われたブータン独特の民族舞踊と歌に生徒達は感動し、受入側が何か大きな贈り物を戴いたような感動を受けました。

また、ホームステイでも、ファミリー自体が「心が温かくなった」、「何が大切なのか改めて考えさせられた」などの感想をもったようで、これまでの青年招へい事業とはひと味違った感動を味わわせて頂きました。関係者の皆様のご協力に心から感謝申しあげます。

（（社）滝川国際交流協会）

「南西アジアIT人材育成」研修員　さっぽろ雪まつりの雪像作りに挑戦!!

「南西アジアIT人材育成」コースの研修員と講師の皆さんが雪まつりの大通会場の雪像作りに参加しました。研修員が作った雪像のテーマは「知床の自然と動物たち」。イルカや熊など、大型の雪像はすでに完成していたので、研修員たちは小型の雪像（リスとウサギ）に取り組みました。皆さんITのエンジニアなので、もともと手先は器用なはず…ですが、リス作りには苦戦。「これ、ゴジラ?」という声も聞かれましたが、しっぽの大きさなどを調整して、なんとかウサギとリスらしき雪像が完成しました。

ネパールのラジェンドラさんは「来日前に雪まつりの写真を見たことがあるけれども、まさか実際に自分で彫ることになるなんて思わなかった。札幌のいい思い出になった」と満足そうでした。雪のなかの作業は寒かったけれども、雪像作りの後は皆で温かい夕食を囲んで暖まりました。

リスやウサギ（?）の雪像を作る
バングラデシュ、スリランカからの研修員